

今年の5月、私が長年敬愛した祖母が亡くなりました。その時に祖母の生前の話を聞いて、ある1つの夢を持つようになりました。

それは性別による偏見や差別によって、本来平等に与えられるはずの職業機会が奪われることなく、男女が協働していける社会を実現することです。それを実現させるためには、性別にとらわれることなく、一人ひとりのアイデンティティーを大切に暮らしていけるような、街づくりが必要となります。

例えば、子育て世代が多くいる地域の場合、女性が安心して子供を任せられるような託児所や保育園があれば、女性も再就職しやすくなります。また、高齢者の人口割合が多く経済力が低下している地域に、大型商業施設を誘致することで、その地域の消費活動が盛んになり、人々の雇用機会も増やすことができます。

そのために自分は商業系の不動産賃貸業を営み、地域に必要な建物や施設などの不動産を提供することで、地域の活性化に貢献したいです。

また、自分が事業を成功させることで、同じように会社を経営したいと思っている人の背中を押せるような存在になりたいです。

私がこう考えるようになった理由には、祖母の死が影響しています。祖母は当時では先進的な女性として、代々受け継がれてきた家業を守り切りました。祖母が社長として会社を経営していたことに、疑問を持つ者もいたそうです。しかし男女差別のフィルターをかけて接してくる人に、祖母は実力で認めさせたのです。祖母を中心に街づくりの一翼を担った、という点で、彼女は私の憧れであり、心から尊敬しています。今日、女性は精力的かつ、以前よりは平等な雇用機会を与えられていますが、そうした今日の状況を作ってきたのが、祖母を含めた戦後の女性たちの尽力の賜物であると感じます。祖母のお葬式の時にこの話を聞き、男女平等の社会の必要性を感じました。

私は地域の活性化や街づくりにおいて社会貢献することで、女性に対するマイナスなイメージを払拭したいです。よくテレビで「女性社長」としての特集がくまれています。これに対して私は疑問を持っています。なぜなら、本来経営者というものは、「その人が何を成し遂げ、どのような形で社会貢献したのか」に重点を置かれるべきであるからです。それにもかかわらず、女性の経営者だから、という理由で注目することは、一種の性別による差別ではないでしょうか。私は「女性なのに経営者になることはすごい」などと性別を理由にレッテルを貼られる世の中は変えていかなければならないと考えています。

以上の理由で私は商業系不動産賃貸業を営む会社を運営することによって、多様性のある社会を目指したいです。この夢を実現するために、まずは大学で経営学にとどまらず、会計学、商業学、経済、産業といった経営と密接に関連する分野を体系的に学びたいです。また、日本の社会問題である少子高齢化社会や格差社会についても学び、経営者としての土台といえる、深い考察力と広い視野を身に付けたいと考えています。

これらの力を大学で身につけた上で、世の中の動きを把握しながら、長期的な視点で住民のニーズを予想した都市計画をしたいです。そして多くの人々の社会進出を促すことができる経営者になって、一人ひとりを個人の能力や個性によって評価できる世の中を目指したいです。